

広報 アノロ

執筆者：栗山町開拓記念館 研究員 坂口 昇一 発行：栗山町教育委員会

泉記念館に収蔵されている「雪薄紋」入り長持



1、仙台伊達家と石川家

泉記念館には、伊達家の家紋の一つである「雪薄紋」が施された長持が展示されています。

まず、栗山町の姉妹都市・宮城県角田市と旧仙台北伊達家について触れておきます。

仙台北の一支部である角田支藩は、代々石川氏により統治されていました。石川家は、はじめ河内の領主でしたが、後三年の役後、奥州仙道の領主になりました。天正 18 (1590) 年、豊臣秀吉の小田原攻略に参陣しなかった石川昭光の領地は没収され、甥にあたる初代仙台北藩主伊達政宗 (1567 ~ 1636) のもとに身を寄せたのでした。政宗は昭光を一門の将として迎え、後に角田を本拠に領地を与えました。禄高 21,380 石、伊達一門で筆頭の地位にあり、伊具郡・荻田郡・柴田郡の 29 村を領有し、角田石川家の創業初代となりました。

2、伊達家から石川家に興入れした二人

元和 5 (1619) 年、伊達政宗の次女^{むすめ}牟宇姫 (1608 ~ 83) が角田石川家三代宗敬^{むねたか} (1607 ~ 68) に興入れし、調度品として雛人形とその膳一式を持参しました (4 ページの写真上)。その調度は、「雪薄紋^{ゆきうすもん}蔦^{つた}時給^{ときく}雛懸^{ひなかけ}盤^{ばん}丸^{まる}い」 (一式、江戸時代中期、個人蔵) の雛道具で、本膳一基、二の膳二基、三の膳二基、飯椀、汁椀、平椀、壺椀、盃、湯桶、長柄湯桶、米櫃、杓子から成ります。外箱によれば、本膳、二の膳、三の膳と小道具類が各一人前ずつ入っていたようです。総体金梨子地とし、伊達家の家紋の一つである雪薄紋と蔦の模様を表しています。雪薄紋は金銀の粉を蒔き分けて^{ぼか}暈しとしたり、雪輪のみを金梨子地としたり、変化をつけています。また、平椀と壺椀は通例では被せ蓋になるのですが、この雛膳では汁椀と同じ落とし蓋になっています。この膳腕類と共に雛人形も伝来しています。

3ページの「伊達家の家紋」は8種類（それぞれの謂れを記しました）確認されています。最下段の雪薄紋は、角田市郷土資料館の牟宇姫（伊達政宗の次女）が石川家に興入れしたときの調度品に施されている家紋です。

また、伊達家三代藩主綱宗（1640～1711）の娘類姫が、涌谷伊達家六代藩主村元に嫁いで安姫（1685～1706）を産み、その安姫は四代仙台藩主の伊達綱村の養女となって、寛永元（1704）年石川家六代石川村弘（1685～1712）に嫁ぎます。

伊達家から石川家に興入れしたのは以上の「牟宇姫」と「安姫」の二人といわれています。いずれも調度品を持参しています。

3、泉記念館の長持

2022年秋に黒須 貫 角田市長一行が表敬訪問された際、泉記念館にある長持を見て、一様に「牟宇姫の家紋だ」「どうして伊達家の家紋が施された長持がここにあるのだろう」と驚きを隠さず、この長持が角田市にあったなら、重要なお宝になるに違いないと口々に話しておられました。角田市では市職員として奉職すると、市の歴史を知るために角田市郷土資料館で牟宇姫由来の雪薄紋などを学ぶといひます。それで、家紋を見てすぐに驚きを見せたのだとわかりました。

その後、角田市郷土資料館にお願いし、牟宇姫興入れの調度品といわれている雛膳に施された雪薄紋（4ページ）の拡大写真を送っていただき、比べると非常によく似ていることがわかりました。

4、では何故、泉記念館に石川家の重要な品が存在するのか

泉麟太郎翁は、戊辰戦争に敗れた角田藩の再興をかけ、明治3年北海道室蘭開拓に身を挺し、その後、夕張開墾組合を組織し明治21年に狭隘な土地から第二の角田を夢見てアノロを拓き角田村を興しました。当時、岩見沢へ行くには、一旦千歳へ出なくてはならず、往復10日を改善するため、道庁の協力を得て岩見沢道路を開削します。その後真成社を設立、水田増田のため全道初の土功組合を設立し、長沼・幌向を開墾し移住者を増やしました。神社仏閣を興し、製線工場を誘致し、橋梁を架設し、学校を興すなど、公共のための努力を惜しむことはありませんでした。

アノロの土地貸下にあたり、道庁の浅羽清部長は「もっと地味の良い（土地の力がある）徳富（今の新十津川）

を薦めたが時間がないと断り、その時道庁では「彼らは餓死する」ものと言われていた。開拓開始の明治21年の翌年からの成績は優良で大正2年時に人口1万人、耕地7千町歩の広大な角田村を建設した泉翁に対し、自分の不明を謝し大いに感嘆した」と述べています。

麟太郎には様々な功績がありますが、石川家からお褒めを受ける確証は今のところ見当たらず、石川家との関連付けを、今後、角田市郷土資料館と協力して紐解いていけたらと思います。

5、大切にされていた長持

泉麟太郎の次女泉子^こ十四さんの孫泉勝文さん（故人）の妻陽子さんは、子十四さんと一緒に暮らしました。長持は内側も総漆塗りで色褪せないように日陰に置き、更に白い布で覆って、子十四さんは大変気を使っていました。

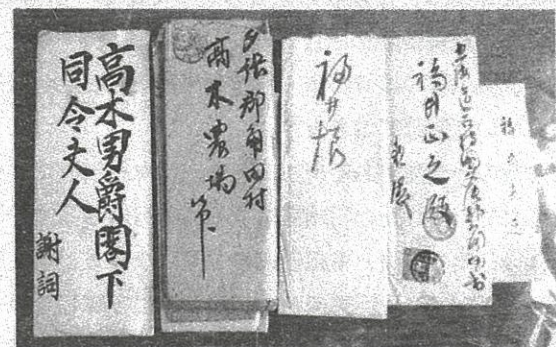
6、雪薄の施された調度品の由来

平成12年仙台博物館発行の「大名家の婚礼」121ページに記載されている、「伝来は牟宇姫の調度品と言われていますが、近年の研究では、漆の塗り方・図柄の具合などの作行からみるともう少し新しい時代の石川家六代村弘に嫁いだ安姫や、他の伊達一門から石川家に入った夫人たちの所用も考えられます（仙台市博物館副館長：高橋あけみ氏談）」とのことでした。

新収資料（7月）

則武 節子様（角田）

- ・則武鐵蕉の日記
- ・鐵蕉宛、巖雄宛封書



則武宛封書等

栗山町開拓記念館では栗山の歴史・産業・文化に関する史資料を収集しています。

何かお気づきの物などがあればご連絡ください。

栗山町開拓記念館：☎ 72-6035

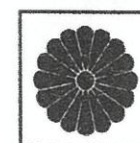
伊達家の家紋 8種類確認されています。大名家の中でも比較的多いです。



三引両紋 ^{みつひかりようもん} 伊達家の家紋の中で、最も古いものとされています。伊達氏第一世伊達朝宗が奥州合戦の際に源頼朝から与えられたもの。使用例から見て伊達家家紋の最も上に位置づけられています。



竹に雀紋 ^{たけ すずめもん} 伊達氏第十五世伊達晴宗の弟・実元が上杉家へ養子に行く引き出物として伊達家の家紋に加わりました。伊達家累代の定紋となりました。



菊紋 ^{きくもん} 初代藩主政宗が豊臣秀吉から与えられたものと伝えられています。花卉が16枚の十六菊紋と、花びらが二重に重なった三十二菊紋が用いられています。桃山から江戸時代初期の遺品に多用されています。



桐紋 ^{きりもん} 政宗が豊臣秀吉から与えられたものと伝えられています。しべの数が五七五の「五七の桐紋」と、三五三の「五三の桐紋」の両方が用いられています。仙台城本丸からも菊紋と桐紋の金箔瓦が発掘されています。



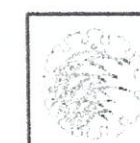
九曜紋 ^{くようもん} 九曜とは、五星（木火土金水）に日と月、日食月食に係わるという空想上の二星（羅睺と計都）を加えたもので、政宗が細川家から譲り受けたとされ瑞鳳殿にも多数使用されています。



牡丹紋 ^{ぼたんもん} 「堅牡丹」とも言われています。延宝8（1680）年二十世綱村が近衛家に申し出て許されました。伊達家が藤原出身であることの証として、江戸時代中期には特に権威がありました。



蟹牡丹紋 ^{かにぼたんもん} 近衛家からもらった牡丹紋を五代藩主伊達吉村が変形させたもので、茎がなく蟹が鉄を振り上げたように見えるので蟹牡丹と言います。仙台牡丹とも呼ばれ、江戸時代中期以後の使用確認がされています。

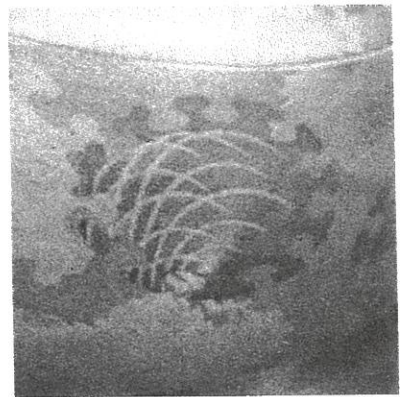
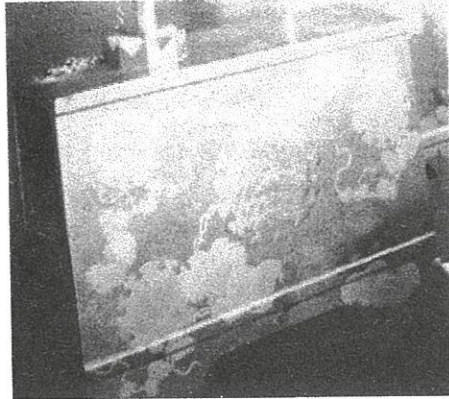
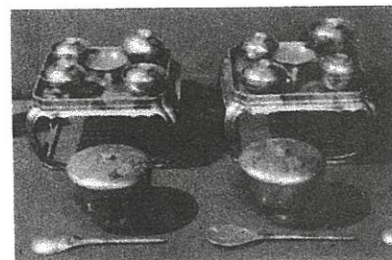
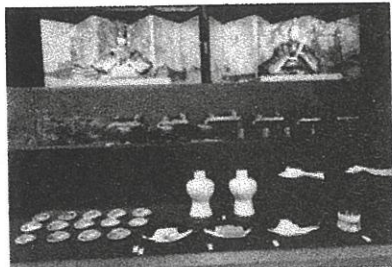


雪輪紋 ^{ゆきすずもん} 雪輪の中に露を置いた薄を表現した雅な家紋です。三引両紋などと異なり、普段使いのものに用いた家紋と考えられています。仙台藩伊達家と仙台藩関係（宇和島藩伊達家など）の家以外の使用は確認されていません。

伊達家「雪薄紋」の調度品

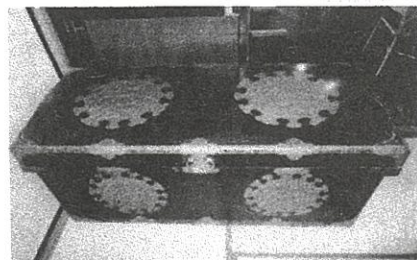
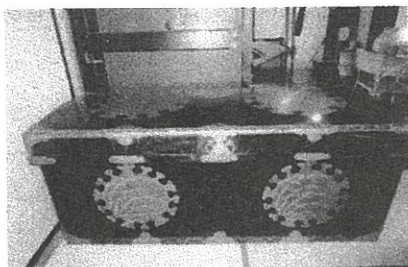
○角田市郷土資料館所有

伊達政宗の次女牟宇姫が石川家第三代宗敬に奥入れした際の調度品といわれる雪薄紋が施された雛膳



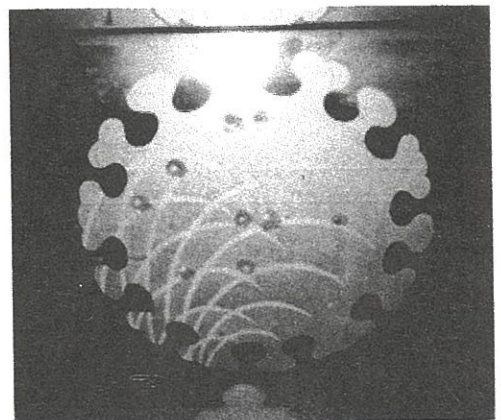
○栗山町泉記念館所蔵

泉麟太郎が所蔵していた長持。上記、伊達家の雪薄紋と非常によく似ている



長持サイズ (cm)

- ・ 幅 /148.0
- ・ 奥行 /68.0
- ・ 高さ /62.5



○イベント情報

第2回開拓記念館特別展「木彫の鮭と熊展」

9月15日から10月末まで

栗山発祥の「千瓢彫り」や「阿野呂彫り」の鮭をはじめ、北海道観光で再び脚光を浴びている熊の木彫りも併せて展示します。

栗山町開拓記念館

利用期間：通年（月曜日、祝日の翌日、年末年始休館）

利用時間：10：00～16：00

入館料：小・中学生 50円

高校生・一般 100円

【問い合わせ】☎ 72-6035